

恋愛小説の

陥穽

三枝和子

恋愛小説の

青土社

恋愛小説の陥穽

©Kazuko SAEGUSA

一九九一年一月三十一日第一刷発行

一九九一年五月二〇日第三刷発行

著者——三枝和子

発行者——清水康雄

発行所——青土社

〒101 東京都千代田区神田神保町一―二九 市瀬ビル

(電話) 三二九一―九八三一(編集) 三二九四―七八二九(営業)

印刷所——dig

製本所——小泉製本

装幀——高麗隆彦

ISBN 4-7917-5122-1

Printed in Japan

恋愛小説の陥穽 目次

序『恋愛の発見』と『生血』

7

漱石の過誤

27

谷崎の矛盾

49

太宰の逃避

69

川端の傲慢

89

荷風の逆説

109

秋声の破綻

129

三島由紀夫の二重構造

149

武田泰淳の虚無

169

石川淳・原型への渴仰

189

結『ノルウェイの森』と『たけくらべ』

209

恋愛小説の陥穽

序『恋愛の発見』と『生血』

最近になって、日本の文豪と言われる男性の作家たちの「恋愛小説」を、もう一度、女の立場から、じっくりと読み直してみたい気持が湧いて来た。

女の立場から、とあらためて断るのは、これまでの私が女の立場からそれらの作品を読んで来なかったのではないかという疑問に捉えられたからである。女である私が女の立場から読んで来なかった、というのはいかにも奇妙な言いかたであるが、この私自身の内部に惹き起こされた釈然としない疑問は、少し大袈裟な表現をとれば、戦後の、いや、明治以後の、さらには日本の、女性思想史の上でも重要な一つの転機をもたらしものと繋がっているのではないか、という漠然とした見通しとも重なるものなのである。

もちろん私は思想家ではない。漠然とした見通し、などと言っても手探りである。しかし自分、体験とそれに伴う思考を頼りに紡ぎ出して来た想念が、時代の動きのなかで、特に最近

輩出して来た女性の思想家たちの発見と響きあうものがあって、これまでの男性の作家たちの「恋愛小説」を再検討したいと考えはじめた。それを、女性思想史の上での転機に繋げなければならぬ、そう思ったのである。繋げて、そのことよって、これまで自明のこととして前提されていた男と女の關係に照明を当て直し、この前提の上に築かれて来た男性側からの芸術や文化に対しても、何らかの見直しをしなければならない、そう思ったのである。

見直しをしなければならない、と表現したけれども、私は別に使命感に駆られているわけではない。これまでのことが嘘と思えて来て、見直しをしなければ、自分自身が落ち着かない、というのが本当のところである。

さて、しかしその見直しの方法であるが、思想家でない私自身は、この検討に当って、あくまで自分一個の思想を通すほかない。すなわち小説を読む行為というのは、必ず当の小説が「私」に働きかけて来るのだから、働きかけて来るものに対して反応する「私」が必ずあるのだから、その「私」がどのような状態でそれらの「恋愛小説」に反応したかを、自分を通して分析するほかない。

おそらく、と私は考える。私の青春時代というのは戦後民主主義思想の影響で、「男女平等」とか、「人間として」とか、何でもそのような方向で物事を考えていたから、この男と女の根本的な区別の上に成立しているはずの「恋愛」についても、時代の風潮に流されて読んで

いたような気がする。

もつとも、青春の時代（私の場合、一六、七から二二、三までの数年間をそう呼びたいのだが）は、自身の精神的成長と体験による自己変貌の甚だしいときであるから、単に「人間として」恋愛小説を読んだわけではなく、男と女の、太古からの営みを通して読む力も自然に備わっていたような気もするのだが、どうも、この太古からの男と女の営み自体が、女の意識を中心に考えると、どの程度、男によって作られたものか、あらゆる面からの検証がなされなければならぬ、そんなふう在最近思いはじめたのである。

実を言うと、この「恋愛小説」を読み直そう、という試みは、ずっと以前にも一度計画したのだけれど、自分のなかでうまくまとまらなかった。ポーヴォワールの『第二の性』などを讀んだ頃で、作られた性、にこだわり過ぎていた。男の書いた「恋愛小説」を、女が、作られた性の立場から讀んだのでは具合が悪い、と言っただけでは片手落ちの何かがあるのではないか。最近の疑問は、これである。

よく言われることであるが、女流作家の書く男性像は、男が読むと隔靴搔痒の感があるそう。私自身、実作者だから、そう言われると複雑な気持ちになるが、女は、男と女の関係においては、男を観ないで自分を観ているのではないか、という通説があつて、さきのポーヴォワールとの関係で言えば、女は常に客体であり、主体とはなり得ない、ということになるのである。

うか。

しかし、こうした観点も、大いに社会制度の影響を受け、変容するものであることを私たちは知らされている。先だっても必要があつて、かなり詳細に『枕草子』を読みこんでいたのだが、清少納言の筆は、女性描写より男性描写において活き活きと動いて居り、妻問婚の時代、女性も同時に複数の男性と関係を持つという社会構造にあつては、女も男を観て書くことが可能だし、読者にもその感性を受け入れる基盤ができていたと言わねばならないだろう。

前置きが大変長くなつたが、実はこれは前置きの前置きで、私が文豪と言われる日本の男性作家の「恋愛小説」を検討する序論のようなものを、ここでは展開してみようと思つてゐるのである。

序論を書くにあつて、私は先ず最近刊行された秋山駿の『恋愛の発見——現代文学の原像』（小沢書店刊）という書物を、男性の恋愛に対する思考の起点におきたいと思つた。個々の具体的な小説を論ずる前に、評論という表現形式において述べられた男性の恋愛観を検討することは、問題をきわめて単純でそれ故根本的な場所から発想する際に必要であると考へたからである。

この書物で私が最も注目した点は、「恋愛」に続いて「犯罪」「戦争」という項目が設定されていることであつた。これは慶応大学久保田万太郎記念講座のなかの「現代芸術」という科

目の前期授業として、学生に対する講義をまとめたものであって、他にも、「病者の論理」「批評の陥穽」などがあるが、「恋愛の発見」「犯罪の意味」「戦争の視力」に内的な繋がりがあのように私は読んだのである。

……恋愛の底には、非常にその人ひとりだけの、自分勝手なものがある。世間がどう言おうと、社会、学校がどう言おうとそんなことは知らない。これが俺には良い。俺はこうするんだ。そういうものです。

それが非常に犯罪というもつひとつのものに似ている。犯罪のなかでも、最もわれわれの関心をひく理由なき殺人のようなものです。誰だって、学校的な知性、あるいは社会の言葉で、人を殺してはいけないということを知っている。知っているにもかかわらず、不意に、道を歩いている全然関係の無い人をいきなり殺してしまふ。何故そんなことをするのか。問われても、犯行者自身にも答える言葉がない。とにかく俺はこの理由なき殺人という行為を犯す。それが俺には必要だ。だから俺はそうする。ここが非常に恋愛と似ています。

これが先ず面白かった。何よりも男性の発想であると思った。「恋愛」すなわち愛の行為において、子供のことがまるで言及されていない、どころか意識を掠めしていないのがきわめ

てそれらしかった。

女性の場合には「それが俺には必要だ」という形では恋愛が成立しないように思える。もちろん、長いあいだの男性社会における「恋愛」というものを女たちも知らされ、文学などで垣間見たりもして、意識を再構成させられる向きもあって、このような男性的な、秋山駿の言葉を藉りれば犯罪的な、恋愛もないわけではない。しかし原則として女性の性欲は、何かこう潮が満つるように溢れて来るもので、極端な言いかたをすれば、その場にいる男は、本当を言えば誰だつていいということになるのではないだろうか。

こういった女性の側からの発想で言えば、何よりも成立しないのが「姦通」という事態である。いや、最近では、これを「不倫」というふうに表示するのか。ともかく通常言われている女性の不倫願望は、満ち溢れて来る女の性欲を、男性社会の枠組のなかで捉え直した形態である、と私は考える。

そもそも、愛の行為が姦通とか、不倫とかいう形態において成立するためには、男の方から言えば相手の女が結婚していなければならぬ。つまり誰かの所有物でなければならぬ。ここにおいて他人の所有物を奪うという形で、恋愛が犯罪になり得る根底がある。

秋山駿は、そのところの構造をきちんと述べていないけれども、「それが俺には必要だ」というふうに発想される行為は、これが恋愛に関わつてある場合、二つの要素を持つことに注